

(様式1)

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「新学習指導要領の趣旨を踏まえた学力向上等の方策に関する調査研究(小・中学校)」
平成23年度委託事業完了報告書
【推進地域】

都道府県市名	香川県	番号	37
--------	-----	----	----

推進地区名	推進校名	研究主題
(香川県)	香川県立高松北中学校	Ⅲ, V型
宇多津町	宇多津町立宇多津北小学校	I, Ⅲ, V型
高松市	高松市立牟礼南小学校	I, II, V型

○ 取組の概要

【香川県教育委員会義務教育課ホームページ参照 <http://www.pref.kagawa.jp/kenkyoui/gimu/gimu/index.htm>】

1. 重点課題への取組状況

香川県では、平成22年度に全国学力・学習状況調査、県学習状況調査の結果を分析し、県全体の課題として、右の4点にまとめ、具体的なアクションとして全教員にリーフレットを配付し、重点的な取組を働きかけた。

- ・ 授業規律の確立
- ・ 学習意欲と学習に向かう態度の育成
- ・ 学習方法の指導
- ・ 補足的な学習

これらの課題解決に向け、本県で取り組んだ事業のなかで次の3事業を中心に報告する。

(1) 学力向上モデル校事業の概要

学力向上に向けて先導的に研究に取り組む学校を言語活動、学習習慣、小・中連携、学力定着のモデル校として指定し、各モデル校の研究を診断的、総括的に評価・検証し、その成果の普及を図ることで、学校の教育力を高め、児童生徒の確かな学力の向上に資することを目的とし、本調査研究で指定する3校を含めた16校2地域で、先導的な取組を実践し、成果を普及してきた。



時期	内容
3月	モデル校指定
4月	モデル校実施計画書検討
5月	「研究成果の参考とする10の指標」第1回アンケート調査
6月	第1回推進会議
7月 ～2月	実践研究期間 指導主事、香川大学による訪問(各校3回程度) 公開授業
11月	「研究成果の参考とする10の指標」第2回アンケート調査
1月	第2回推進会議
2月	モデル校実績報告書のまとめ
3月	義務教育課ホームページ掲載

2. 調査研究の成果及び今後の課題

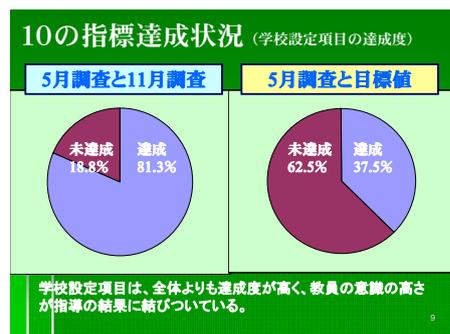
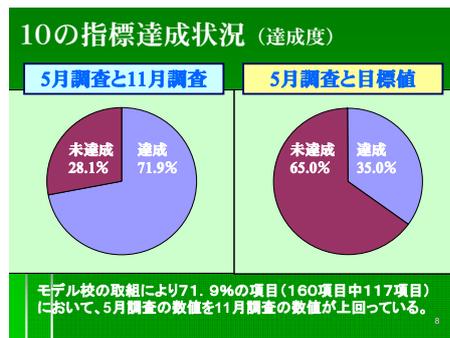
(1) 学力向上モデル校事業の成果と課題

① 「研究成果の参考となる10の指標」の設定

研究推進に当たり、研究の視点を明確にして推進する、研究実践の前後のデータを客観的に比較する、データから研究実践を考察するなど、数値結果をもとに研究成果を広く普及することを目的とし、県で7項目、モデル校独自も3項目について、アンケート調査等をもとに数値目標を設定した。(下の表は、学力定着モデル校の例)

「研究成果の参考とする10の指標」達成状況一覧

No.	対象	目標値(c)	基礎データ(b)	比較データ(a)	a-b	a-c	
県設定7項目	1 児童	私語なく先生や女だちの話をしっかり聞くなど、集中して授業を受けていますか。	85.0%	77.4%	71.2%	-6.2%	-13.8%
	2 児童	授業では、ノートをていねいに書いていますか。	85.0%	81.5%	83.6%	2.1%	-1.4%
	3 児童	授業の内容がどの程度分かりますか。	5.0%	7.5%	6.8%	0.7%	-1.8%
	4 児童	家で自分で計画を立てて勉強をしていますか。	80.0%	77.7%	66.4%	-11.3%	-13.6%
	5 教員	学習規律(私語をしない、語をしている人の方を向いて聞く、聞き手に向かって語をするなど)の維持を徹底していますか。	100.0%	100.0%	100.0%	0.0%	0.0%
	6 教員	学習方法(適切にノートをとる、テストの間違いを振り返って学習するなど)に関する指導をしていますか。	100.0%	100.0%	100.0%	0.0%	0.0%
	7 教員	児童生徒に与えた家庭学習の課題について、評価・指導を行っていますか。	100.0%	100.0%	100.0%	0.0%	0.0%
モデル校設定3項目	8 児童	自分の考えをことばや数、式、絵や図、数直線などでかいていますか。	85.0%	83.5%	85.6%	2.1%	0.6%
	9 児童	自分の考えを友だちに分かってもらうために、ことばや式、絵や図などを使って説明していますか。	85.0%	62.8%	85.6%	22.8%	0.6%
	10 児童	友だちの考えのよいところを見つけながら聞いていますか。	85.0%	65.5%	80.8%	15.3%	-4.2%
					8	5	
					2	5	



② 「研究成果の参考となる10の指標」の全体の達成状況

14校2地域の達成状況をみたととき、上のグラフのとおり、モデル校の取組により71.9%の項目(160項目中117項目)において、5月調査の数値を11月調査の数値が上回っている。

学校で独自に設定する項目は、さらに達成度が高くなっている。これは教員の課題(指標)に対する意識の高さが指導の結果に結びついていると考えられる。

③ 「研究成果の参考となる10の指標」の事業ごとの達成状況

○ 言語活動の充実促進モデル校事業

- ・ 普段の授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていると思いますか。(4校中3校が向上)
- ・ 単元計画を作成する際に、言語活動相互の関連を考えていますか。(全4校が向上)
- ・ 児童(生徒)の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしていますか。(4校中3校が向上)

○ 学習習慣形成モデル校事業

- ・ 家で学校の授業の復習をしていますか。(7校中6校が向上)
- ・ テストで間違えた問題について、間違えたところを後で勉強していますか。(7校中6校が向上)
- ・ 学校の授業以外に、ふだん(月～金)、1日あたりどれくらいの時間、勉強をしますか。

か。(7校中6校が向上)

○ 小中連携モデル校事業

- ・ 小・中学校の教科の系統性を意識して授業を行っていますか。(中学校区で向上)
- ・ 保護者や地域の人々の参加や協力を得るなど、地域の人材を生かした授業を行いましたか。(中学校区で向上)

○ 学力定着モデル校事業

- ・ 学習規律(私語をしない、話をしている人の方を向いて聞く、聞き手に向かって話をするなど)の維持を徹底していますか。(全3校が100%を達成)
- ・ 学習方法(適切にノートをとる、テストの間違いを振り返って学習するなど)に関する指導をしていますか。(全3校が向上)

④ 学力向上モデル校事業における成果と課題

<成果>

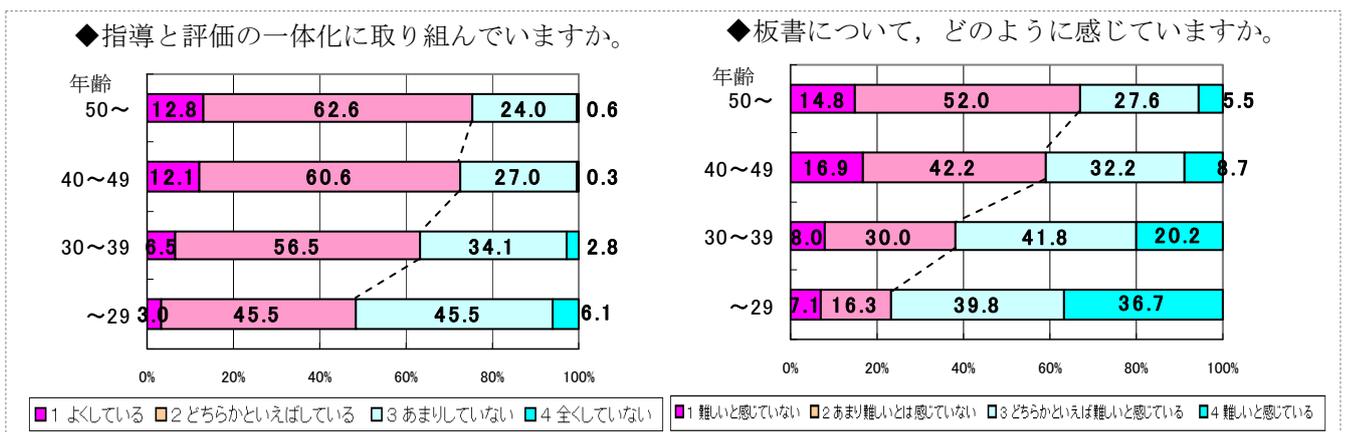
- ・ 教育課題の解決に向けた貴重な実践が蓄積された。
- ・ モデル校は、10の指標の数値から客観的に見ても、児童生徒、教員に成果が表れている。
- ・ 香川の教育づくり発表会のアンケートからもモデル校に対する関心の高さが覗え、多くの情報交換ができた。
- ・ 授業の公開等により、近隣の教員が質の高い授業を参観することができ、刺激となった。

<課題>

- ・ 研究成果の評価について、さらに、成果を的確に把握すること、貴重な成果を具体的に示せるようにすることが必要である。
- ・ モデル校の成果を普及する場を充実させ、モデル校以外の学校や地域にも成果があがるような方法を工夫する。

(2) 教員の指導力向上セミナーの成果と課題

本県の全小中学校教員の28.2%にあたる1600名にアンケート調査を行ったところ、下のグラフのとおり、今後増加していく若年教員の多くが指導に不安を感じている項目が明らかになった。



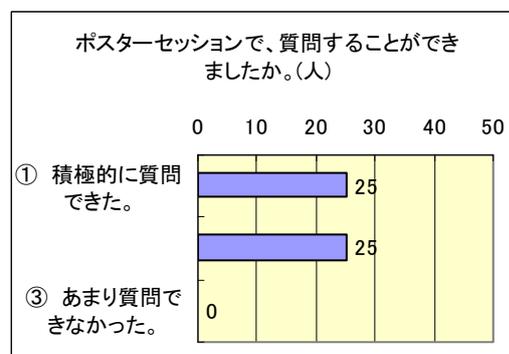
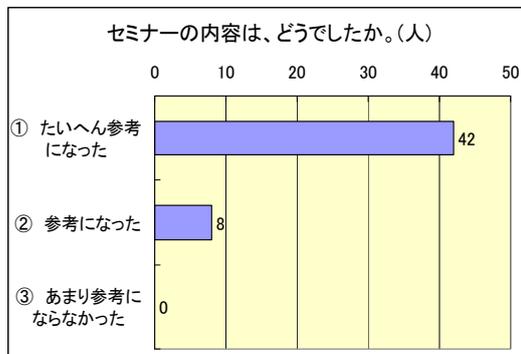
このような現状をうけ、特定の教科や領域にかかわらず、普段の実践から自ら課題を見付け、その課題解決に取り組む機会とするためにセミナーを行った。

参加者が設定した個人課題の例

- ・ 授業規律の確立のために生活や学習の小さな目標を設定し、やり遂げた充足感を味わえるようにする。
- ・ 学習習慣を身につけ、学習を定着するために、やりがいがあり、意欲的に取り組める家庭学習を考える。
- ・ 書く力を伸ばす板書計画とワークシートの工夫
- ・ 教科書から一歩踏み出して、身近な生活に関連した学習課題を設定し、能力に関わらず、楽しく取り組める授業構成にする。

このセミナーは、事後アンケートから分かるように、参加者が充実感、達成感を味わえるものとなった。その理由として、自分の普段の実践から課題を設定すること（必然性）、計画を立て短期間集中して実践すること（具体性）、ポスターセッションで交流すること（対話）、小グループで話しやすいこと（親和）などが考えられる。

参加者が、今回のセミナーによる実践の一つの成功体験として自信をもち、1歩ずつ前進することが指導力向上に大きな効果をもたらすと考える。



セミナー終了後の参加者の感想

- ・ 1 回目の研修の時に、いろいろ話し合っってテーマを絞っておけたので、発表に向けての実践もぶれずにできた。今回新しく取り入れた実践を今までにやってきたこととつなげ、自分の中で整理するよいきっかけとなった。今後も継続、改善していきたい。
- ・ 自分が少しだけ変わるきっかけをいただきました。ありがとうございました。（9月から）続けてきた取組を今後も継続していきたいと思ひます。また、さらに変わっていきけるようなヒントをたくさん他の先生方からいただくことができました。

課題としては、このセミナーは少人数であることが特徴であるため、このままでの方式での事業の拡大は難しいことである。多人数になっても効果のあがる方法を考えたい。

(3) 香川の教育づくり発表会の成果と課題

冬季休業中の1月5日開催にもかかわらず、幼稚園3、小学校27、中学校8、特別支援学校1、教育委員会2、その他1が、34の発表を行い、県内教員はもとより、県外教育委員会及び教員、PTA役員、大学教授、大学生など、1200名の参加があった。香川県の小・中学校教員の約5分の1にあたる人数である。県下の先進的な実践を広く普及させるために、この積極的な参加の状況は大きな成果ととらえている。また、アンケート（589名）では、研究発表内容を「大変参考になった」「参考になった」をあわせて、99.3%と好評であった。



香川の教育づくり発表会参加者の感想

- ・ 充実した研究が多く、大変参考になりました。発表の仕方にも工夫があり、最後まで集中して聞けました。発表校は、全職員の協働研究を大切にされており、発表者一人一人が自信をもっているように見えました。校内研究のレベルアップにつながるすばらしい取組と思ひます。
- ・ どの学校の発表も内容が充実しており、たいへん勉強になりました。各校の具体的授業実践や、その中で使用した教材・教具、児童の表現物、ノート、ファイルなどの実物を見せていただけたので、とても参考になりました。今日学んだことは、現職教育の時間に伝え、研究に生かしていきたいと思ひます。
- ・ 15分間の語らいの時間での質疑応答の時間が、とてもよかったです。自分が知りたいなあと思ひていることを他の人が質問してくれたのを聞いたり、発表では聞けなかったことを聞けたりでき、参考になった。発表の時間帯以外でも、ベースに学校の人がいって質問することができ、よかったです。発表の時間にはたくさんの人が集中しているため、個別に質問する時間は限られているので助かったし、ゆっくりと資料や子どもの足あとなどを見ることができ、よかったです。

(4) その他の事業からの課題

本県では独自の学習状況調査を行っており、その結果から明らかになった課題を全小・中学校教員、小学校4年生から中学校3年生までの全児童生徒にリーフレットにして配付し、次年度の教育施策の核となる内容を教育現場で共有して指導と学習が行われるようにしている。

平成 23 年度末、全教員に配付するリーフレット

Action 1 思考力・判断力・表現力等を伸ばす指導

思考力・判断力・表現力が高い子どもは知識・技能も定着している

自分の考えを表現する機会があれば、思考力・判断力・表現力も伸びる!!

表現する機会が与えられている子どもほど正答率が高い

多くの教員は、異活動を通して指導を行っている。

思考力・判断力・表現力等を伸ばすには・・・

- 調べる時間や考える時間を確保した授業をする。
- 子どもが自分の考えを発表できる授業をする。
- 交流活動を通して互いに高め合う授業をする。

Action 2 学習意欲向上のための指導

昨年度より授業がわからない子どもの割合が増加
同程度でも授業がわからない子どもの割合が増加

教員や友達に質問できれば、勉強ができるようになる!!

中学校から全県不正解の子ども割合が増加

多くの教員は、分かりやすい前置きを心がけている。

学習意欲向上のためには・・・

- 授業を振り返ることのできる分かりやすい板書を工夫する。
- 子どもの実態に応じて、できる喜びや分かる楽しさを味わえる授業を工夫する。
- 子どもの良い点を褒める、励ますなどの声かけを工夫する。

Action 3 学習方法を身に付けるための指導

間違えたところをやり直す子どもほど正答率が高い

学習方法を教えれば、勉強ができるようになる!!

ノートを丁寧にとる子どもほど正答率が高い

多くの教員は、学習方法の指導を行っている。

学習方法を身に付けさせるには・・・

- 授業がわかるための家庭での学習方法（予習や復習の仕方）を教える。
- 家庭での学習に生かせるノートの書き方、まとめ方を教える。
- テストなどで間違えた問題は、必ずやり直させる。

Action 4 学習習慣形成のための指導

家庭学習をしっかりとする子どもほど正答率が高い

宿題の指導・評価を行えば、勉強ができるようになる!!

多くの教員は、宿題を工夫して出している。

学習習慣を形成させるには・・・

- 宿題は、内容（授業との関連）や量を考えて出し、提出させた宿題は必ず点検する。
- 学習計画を立てさせ、後で振り返りをさせる。
- 学習内容が定着するように、繰り返し学習させる。

平成 24 年度始め、全児童生徒に配付するリーフレット

小学 4 年生 学び方シート

香川県教育委員会事務局義務教育課 <http://www.pref.kagawa.jp/kenkyouji/gimu/gimu>

学び方シートとは

□ 昨年 11 月に行った学習状況調査の意識調査の結果から、香川県の小学 4 年生のみなさんに気を付けて欲しいところや、大切なことを示しています。

□ 「4 年生で身に付けて欲しいこと」や、「学び方のポイント」を読んで、授業中や家庭で勉強する時のヒントにしましょう。

保護者の方へ - 4 年生で身に付けて欲しいこと -

問題の平均正答率と質問紙調査の結果を参考に、次のことに取り組んでください。

○ **授業の準備をする**
授業の準備が整っている子どもは、授業に集中して取り組んでおり、学習内容の定着率が高くなっています。学校に持っていくものを、前日に確かめておくことが大切です。

○ **見直しを持って生活する**
家で学校の宿題をしている子どもは、学校で勉強した内容の理解が高くなっています。この時期に身に付いた学習習慣は、これからの子どもの成長に大いに役立ちます。見直しを持って生活し、取りかかりの時間を決めて取り組むことが大切です。

○ **主体的に学習に取り組む**
できるだけ繰り返して取り組むことやまちがえたところの見直しをすることで、勉強に自信が持てるようになります。子どもの努力や取り組み姿勢をほめたり、励ましたりして、主体的に学習に向かう態度を育ててください。

学習状況調査 児童生徒質問紙調査より

家で学校の宿題をしていますか

授業で習ったことを家で確かめたり、練習したりして、理解することは大切なことです。

家で学校の宿題をすることの大切さが左のグラフからよく分かります。家庭学習でも教科書やノートを使って勉強しましょう。

※このグラフでは、各選択肢を選んだ児童生徒の正答率の平均を平均正答率として「%」で表わしています。

小学 4 年生 学び方のポイント

○：学校での学習について
◇：家庭での学習について

【大切にしたいこと】

- 授業中だけでなく、いつでも人の話をしっかりと、最後まで聞くこと。
- 授業では自分の考えや思いを書いたり、話したりして相手に伝えること。
- 毎日、家で漢字や計算の練習をできるまでくり返して、まちがえた問題をやり返すこと。そして、宿題を忘れずにすること。

【国語】

- 友達の発表を聞くときは、一番大切なことは何かを考えながら聞きましょう。
- 相手や目的に合わせて、自分の考えがはっきり伝わるように書きましょう。
- 自分の好みや目的に合わせて、本を選んで読みましょう。
- 習った漢字の読みや書きを練習しましょう。

【社会】

- 方位や地図記号など地図を読むときのやくそくを知り、県の地図や地図帳を使って調べましょう。
- 調べて分かったことや考えたことを、地図を使ってまとめましょう。
- テレビや新聞で取り上げられた地名は地図帳で位置を確認しましょう。

【算数】

- 図形の性質や数量の関係を進んで調べましょう。
- 調べたときに使った図や式を見せながら友達に説明しましょう。
- 計算の繰り返し練習をするときには、答えがいくらくらいになるか予想してから計算をしましょう。

【理科】

- 観察や実験では、いろいろな事象を比べたり、関係付けたりしながら調べましょう。
- 結果を図、表、グラフなどにして、わかったことを説明しましょう。
- 学習したことをもとに、ものづくりにチャレンジしたり、生き物や天気のようなすなどに目を向けたりしましょう。

(様式1)

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「新学習指導要領の趣旨を踏まえた学力向上等の方策に関する調査研究(小・中学校)」
平成23年度委託事業完了報告書
【推進地域】

都道府県名	熊本県	番号	43
-------	-----	----	----

推進地区名	推進校名	研究主題
山江村	山江村立山江中学校	I, II, III型
天草市	天草市立本渡中学校	I型

○ 取組の概要

1. 重点課題への取組状況

本県における重点課題である、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力、判断力、表現力等の「確かな学力」の育成については、本県、義務教育課の取組の指針である「義務教育課取組の方向」に位置付け、各学校で推進を図ってきた。

基礎的・基本的な知識・技能の習得とこれらを活用して課題解決に必要な思考力、判断力、表現力等の育成及び主体的に学習に取り組む態度を養う教育の推進・「徹底指導」と「能動型学習」とのめりはりをつけた熊本型授業の質を高める計画的、組織的な取組を推進する。

- ・「ゆうチャレンジ」の場面設定や設問等を活用し、教材の開発や学習活動の一層の充実を図る。
- ・教科等の特質に応じた言語活動を指導計画に位置付け、その教科等の目標の実現に向けた授業の構成や展開の工夫改善を図る。
- ・適切な学習評価のもと、個に応じた学習活動の一層の充実を図るなど、指導と評価の一体化を推進する。
- ・学校図書館の整備・充実に努め、その活用による主体的な学習活動や読書活動の一層の充実を図る。

これらのことを踏まえ、本事業においては、各推進地区や推進校における研究主題を基に、生徒の実態を踏まえた「確かな学力」の育成のために、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために各教科の特性を

踏まえ、意図的に言語活動を設定し、必要な思考力、判断力、表現力等その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うための実践研究を推進すること、また、その研究成果の普及の在り方を検討し、成果の全県的な普及に努めることをねらいとする。

(具体的取組)

(1) 「熊本県確かな学力の育成に係る実践的調査研究支援会議」の実施

推進地域及び推進地区、推進校の関係者による会議を開催し、確かな学力の育成に係る実践的調査研究の推進において、具体的な研究内容についての発表、協議や県教育委員会からの指導・助言を行い、研究1年目における課題を明らかにし、その解決を通して次年度へ向けての研究の充実を図った。

(2) 「学力向上対策検討委員会」の開催

学校関係者、有識者、県民代表等から広く意見を聴取し、小中学校における新学習指導要領の全面実施を踏まえ、児童生徒の学力を向上させるための今後の対策について検討を行った。会議では、言語活動の充実を踏まえた指導方法の工夫改善の推進や家庭、地域と連携した学力向上の取組について意見が出された。

(3) 「ゆうチャレンジ」(熊本県学力調査)の開発・実施

本県独自の評価問題である「ゆうチャレンジ(県学力調査)」の開発・作成を行い、11月～1月に実施した。対象学年は、小学校第3学年から中学校第3学年。対象教科は、国語、社会、算数・数学、理科、英語(中学校)。知識や技能を測る問題と、自ら学ぶ意欲や思考力・判断力・表現力等までを含めた到達度を客観的に把握できる問題であり、結果の分析だけでなく、例えば、授業において「ゆうチャレンジ」(熊本県学力調査)問題を生かした教材の開発、発問の工夫、自作問題の作成など、授業改善の方向や活用方法について、「県学力調査結果報告書」の配付等を通して推進している。

本事業の推進地区及び推進校においても、全国学力・学習状況調査の結果と照らし合わせて本調査の結果を分析・考察することによって研究の成果や課題を明らかにし、授業改善に生かしている。

(4) 「ゆうチャレンジ単元別評価問題」の作成、実施

本県学力の課題でもある思考力、判断力、表現力等の育成に向けた日常的な指導と評価の一体化を図るため、本県独自の評価問題「ゆうチャレンジ」に準じた単元別評価問題を開発し、国語と算数・数学について、県教育委員会ホームページに掲載し、その活用を図った。本年度末までに、小学校社会、理科の問題を作成し、県教育委員会のホームページに掲載することとしている。

(5) 「基礎学力向上システム推進事業」の取組

「確かな学力」をはぐくむためには、小学校低学年からの基礎学力の向上を図ることが重要であることから、平成22年度から本事業を立ち上げ、県内11のモデル校において、地域の教育力を生かした支援体制づくりや学習支援の在り方について研究を進めた。

(6) 推進地区・推進校における研究の充実に向けた取組

- ・推進校区内の小学校を含めた合同研究推進委員会，小中連携合同研修会，小中交流の実施。
 - ・研究1年目の成果について，推進地区内への普及のための研究発表会の実施。
- (7) 推進校への訪問指導

各推進校の訪問指導の希望に応じて，研究初年度における研究内容及び推進体制の充実について，研究授業，授業研究会等を通して指導，助言を行った。

2. 調査研究の成果及び今後の課題

(成果)

- 各推進地区，推進校における実践的調査研究を通して，全面実施を目前にした中学校新学習指導要領の新しい学習内容の実施に向け，各教科等の特質に応じた言語活動や教材開発，指導方法等について，実践的事例の収集を行うことができた。
- 「基礎学力向上システム推進事業」の各モデル校においては，基礎学力の向上はもちろん，学習支援ボランティアからの励ましによる，児童の学習意欲の向上など，着実に成果が表れた。また，モデル校の取組事例について，「実践事例集」を作成し，県内すべての小学校に配付した。
- 平成23年度「ゆうチャレンジ」（熊本県学力調査）結果から，「話し手の意図をとらえながら話の内容を聞き取ること」や，「与えられたテーマについて自分の思いや考えを表現すること」など比較的自由的な立場や簡易な条件の下で自分の思いや考え，分かったことなどを表現する内容については，概ね定着している。
- 平成23年度「ゆうチャレンジ」（熊本県学力調査）質問紙調査（教諭，講師）結果から，「日々の授業の中で，児童生徒が自分の思いや考えを書いたり，発表したり，また，児童生徒間で，問題解決の方法等について意見を交換する場を設けている」など各教科の特性を踏まえ，意図的に言語活動を設定し，自分の考えなどを書いて表現したり，協議したりする学習活動については，小学校で9割以上，中学校で8割近くとなっており，思考力，判断力，表現力等の育成に向けた取組が充実されつつある。
- 推進校においては，各教科の特質に応じた言語活動を年間指導計画に位置付けるとともにその充実を図り，思考力，判断力，表現力等を身に付けさせる授業づくりへの取組が行われた。

(課題)

- 平成23年度「ゆうチャレンジ」（熊本県学力調査）結果において，「文章や図，表，グラフ等を読み取り，分かったことや考えたことなどを，根拠を明確にして適切に表現すること」，「観察・実験の結果を考察し結論をまとめること」，「聞いたり読んだりした内容について，自分の考えを表現すること」など，思考，判断し，表現する内容については依然として課題がある。また，学習指導要領の改訂で新たに加えられた小学校理科の「風やゴムの働き」や「月と太陽」，中学校理科の「力とばねの伸び」や「力の合成・分解」，中学校数学の「不等式」「比例式」「代表値」

の理解に課題がある。

- 平成23年度「ゆうチャレンジ」(熊本県学力調査)の質問紙調査(児童・生徒)において、「教科の学習が好き」「教科の学習が理解できている」と回答した児童生徒の割合は、依然として小学校6年から中学校1年にかけて段差が見られる。
- さらに、小学校3年生の時点においても、約2割の児童が教科の内容について「十分に理解していない」と回答しており、小学校低学年からの基礎学力の定着についても引き続き課題がある。
- 各推進校においては、昨年度までの研究指定校の研究成果を踏まえるとともに、小中連携による学力充実に向けた方策を充実することが求められる。
- 「確かな学力」の育成に向けた授業づくりにおいては、日頃の学校づくり、学級づくりが基盤であり、学習習慣、生活習慣、学習規律など子ども達の生活の在り方を見直す必要もあり、学校だけでなく、家庭、地域と連携した一層の取組も求められる。

(様式1)

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「新学習指導要領の趣旨を踏まえた学力向上等の方策に関する調査研究(小・中学校)」
平成23年度委託事業完了報告書
【推進地域】

都道府県名	宮崎県	番号	45
-------	-----	----	----

推進地区名	推進校名	研究主題
五ヶ瀬町	鞍岡小学校	I・IV・V型
五ヶ瀬町	三ヶ所小学校	I・IV・V型
五ヶ瀬町	坂本小学校	I・IV・V型
五ヶ瀬町	上組小学校	I・IV・V型
五ヶ瀬町	鞍岡中学校	I・IV・V型
五ヶ瀬町	三ヶ所中学校	I・IV・V型

○ 取組の概要

1. 重点課題への取組状況

(1) 「みやざき学力アップ支援委員会」の設置による本県の学力向上に係る取組の総合的な推進

宮崎大学，教育事務所，県算数・数学教育研究会，推進地域と連携した「みやざき学力アップ支援委員会」を設置し，本県の学力に関する課題を共通理解し，その解決に向けての協議をとおして，共通実践を行ってきた。

平成22年度までの全国学力・学習状況調査や毎年実施している県独自の学力調査の結果分析から，本県の学力に関する課題として，「知識・技能を活用する問題について，継続的な課題がみられる」，「各設問を個別にみると，知識に関する問題においても課題がみられる」という2点があげられる。

そこで，本県では，基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図るとともに，「身に付けた知識・技能をもとに，自ら考え，判断し，表現しながら課題を解決する力」(以下「活用する力」という)を育成するために，以下のような取組を行い，各学校における学習指導方法の工夫・改善を支援してきた。

① 算数・数学科「Web学習単元評価システム」を活用した実践研究の推進

各単元の学習内容の定着状況を見届け，その後の授業改善，個別指導等に生かすことのできるシステムの運用を昨年度10月より全県的に開始し，その活用推進と効果的な活用の在り方について実践研究を行ってきた。実践研究に当たっては，活用推進地域を3地域，その地域の中に活用推進校を小・中学校それぞれ2校指定し，計12校で実践研究を行ってきた。本システムの評価問題は，基礎的・基本的内容のA問題と活用に関するB問題で構成し，本県の課題解決を図っている。

また、システムの効果的な活用方法を県下全ての学校に説明する機会を設けたり、システム上で配信したりして、実践研究の成果を普及することができた。

② 「みやざき小中学校学力・意識調査」の実施と結果分析

児童生徒の学力の現状を把握するために、小学校第5学年と、中学校第2学年を対象に本県独自の学力調査を悉皆調査で実施している。また、調査の分析結果をホームページに掲載し、県全体の成果や課題を明らかにして授業改善の視点を明確にした。

③ 各学校における改善計画書の策定とその実践

②の学力・意識調査の経年比較を各学校で行い、学校の課題とその解決方策を記述した改善計画書を策定し、その実践に努めた。年度末には、実践に対する検証を行い、実施報告書として各学校でまとめ、学力向上マネジメントサイクルの確立を図っている。

④ 教員の指導力を高める（課題解決を図る）授業研究会の実施

②の学力・意識調査を各地域ごとに分析し、その地域の課題を解決する授業研究会を小学校14校、中学校16校で実施し、教員の指導力の向上に努めた。

⑤ 「新学習指導要領カリキュラム創造サポート事業」の実施

県内3つの地域で、指導主事による模擬授業や新学習指導要領の趣旨をふまえた授業改善の在り方について、ワークショップ形式で研修会を行った。平成21年度からの3年間継続実施により、県内全ての教諭が研修会を受講した。

⑥ 算数・数学の「活用する力」を高める授業力強化事業の実施

本県の課題を解決するために、授業改善に係る取組を推進する県内の小・中学校20名の中核教員を育成し、授業力の向上に努めた。さらに、中核教員による授業公開や「学力向上地域別推進協議会」の開催により、成果の普及を図った。

(2) 推進地区（五ヶ瀬町）の実践研究の推進

推進地区の五ヶ瀬町では、小規模校が点在する中山間地域の特性を生かして、「五ヶ瀬教育ビジョン」のもと、「G授業」や「協調学習」の考え方を取り入れた学習指導法など、地域の実態に応じた特色ある取組を進めている。

① 研修の場の設定

推進地区と連携し、「Web学習単元評価システム」の説明会、授業研究会、管理職対象の研修会に講師として参加し、実践研究の推進を図った。また、本県が実施する学力向上に係る研修会に、推進校の教職員が積極的に参加し、指導力の向上を図った。

② 「Web学習単元評価システム」を活用した協調学習の推進

推進地区で取り組んでいる「協調学習」において、「Web学習単元評価システム」を活用して、実態把握、問題の分析、評価を行い、授業改善を図っている。この取組について、「Web学習単元評価システム実践研究協議会」と同時に開催した「みやざき学力アップ支援委員会」で発表を行い、成果の普及を図った。

③ 「活用する力」を高める指導法の研究

「活用する力」を高めるための指導方法の研究として、「大学発教育支援コンソーシアム推進機構（CoREF）」と連携して、授業研究協議会を開催し、成果の普及や今後の課題解決のための協議を行った。

2. 調査研究の成果及び今後の課題

(1) 調査研究の成果

上述のように、本県では、県の学力調査の結果を検証し、指導方法の工夫・改善につながる学力向上マネジメントサイクルの推進を図ってきている。

その中で特に、指導方法の工夫改善の視点として、本県の課題である基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着と「活用する力」の育成を中心に取り組んできた。

○ 「Web学習単元評価システム」の活用推進

問題のダウンロード率が100%となり、システム活用の普及を図ることができた。また、システムを活用した授業改善に係る提案、情報提供ができた。

○ 教員の指導力を高める（課題解決を図る）授業研究会

本会の主な成果として、以下の点が上げられる。

- ・ 学力・意識調査の結果分析から問題点を明らかにし、課題を設定したため、授業参観者にとって視点が明確になり、授業研究会でも活発な協議ができた。
- ・ 自分の考えを書く活動の意義や在り方について提案したり、協議したりしたことで、授業改善の視点として強調することができた。
- ・ 活用する力を育成するためには、科学的な思考力や表現力を高めることが重要であり、言語活動の充実を図ることがその手立てとなることを協議できた。また、単元をとおして児童生徒に育てたい力を明確にして指導していくことが重要であることを共通理解できた。

○ 「新学習指導要領カリキュラム創造サポート事業」における評価

評価項目	4段階評価（平均値）
ワークショップに参加しての満足度は高かったですか。	3.7
新学習指導要領の趣旨や内容について理解できましたか。	3.5
「授業改善したい」等、意欲付けとなりましたか。	3.7

○ 「活用する力」を高める授業力強化事業における授業公開評価

評価項目		肯定的な回答の割合
授業	授業改善の視点に基づいて指導方法の工夫・改善が適切に行われていましたか。	96%
内容	授業、協議等の内容は、「活用する力」を高める授業改善に役立つものでしたか。	96%

(2) 調査研究の課題

本年度取り組んできた実践が、児童生徒の学力向上や教員の授業力向上につながっているのかをさらに具体的に検証していく必要がある。特に、今後実施される全国学力・学習状況調査や県独自の学力調査を詳細に分析し、本県の課題である「活用する力」の育成と学校における授業改善の成果と課題を明らかにしていく必要がある。

また、市町村教育委員会と連携しながら、学力向上マネジメントサイクルを基盤とした総合的な学力向上対策を推進することにより、長期的なスパンと短期的なスパンの両面から、児童生徒の変容を確かめ、県としての学力向上の取組をさらに充実させていく必要がある。

(様式1)

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「新学習指導要領の趣旨を踏まえた学力向上等の方策に関する調査研究（小・中学校）」
平成23年度委託事業完了報告書

【推進地域】

都道府県名	仙台市	番号	49
-------	-----	----	----

推進地区名	推進校名	研究主題
仙台市	仙台市立荒町小学校	Ⅱ型
仙台市	仙台市立富沢中学校	Ⅱ型

○ 取組の概要

1. 重点課題への取組状況

「確かな学力育成室」を中心として、東北大学加齢医学研究所（川島隆太教授ら）との協働により、学力検査結果及び生活・学習状況調査の相関分析を中心に行ってきたが、今年度は推進校（仙台市立富沢中学校、仙台市立荒町小学校）を設置し、これまでの相関分析に加え、授業改善、人間関係・学級づくりなどの具体的検証を重点課題とした。しかし、震災直後という事情もあり、次の事項を重点課題として取り組んだ。

(1) 仙台市標準学力検査及び仙台市生活・学習状況調査

平成23年4月21日、市内全ての学校が再開した。一方で、間借り先の学校で教育活動を展開しなければならない学校があるなど、多くの学校が震災による様々な課題を抱えていた。このような状況にありながらも、基礎・基本をしっかりと身につけさせることができるよう、児童生徒一人一人の学力の状況をきちんと把握し、指導に生かすことが大切であると考え、仙台市標準学力検査を実施した。また、仙台市生活・学習状況調査についても震災による生活、学習環境への影響と、そうした中での児童生徒の生活実態を把握する上で非常に重要であり、個々の指導に生かすための今後の指導、支援のあり方を検討する上でも意義があると考え、実施した。

※ 7月14日に実施。

(2) 学力向上研修会

各校の学力向上担当者を対象とした研修会を2回開催し、中学校区ごとに標準学力検査結果についての情報交換を行った。地域の児童生徒の実態を踏まえた学習習慣の形成や指導方法の工夫、小中の円滑な接続に向けた交流の企画などについて活発な意見交流がなされた。

※ 8月31日、1月18日に実施。

(3) 幼小合同研修会

小学校入学児童がスムーズに学校生活に適應できるようにすることや、小1プロブレ

ムの解消を目指して、今年度から全小学校で「スタートカリキュラム」を作成し、実践している。また、地域ボランティアを活用して落ち着いた学習や生活に取り組める環境をつくる「小1のための生活・学習サポーター事業」の拡大に取り組み、小学校入学時の不適応軽減を図っている。

※ 8月19日に実施。

(4) 「学習意欲」の科学研究に関するプロジェクト

平成22年2月、東北大学と共同研究を締結し、脳科学の知見を活用して、科学的に研究するプロジェクトを立ち上げた。学校現場での経験や実例、また、学習意欲についてのデータ等を基に、脳科学や認知心理学の観点から、東北大学川島隆太教授を中心とした学習意欲について科学的に分析するプロジェクト会議（2年目）を開催した。児童生徒の生活習慣や学習環境の改善に活用するための小学校2年生以上で実施している生活・学習状況調査の質問項目を検討した。また、推進校においては、授業観察及び視線測定の前備調査を実施した。

5月25日	・震災に伴う、平成23年度生活・学習状況調査の質問項目改訂 ・推進校への協力依頼
6月 3日 8日	・仙台市立荒町小学校にて、授業観察と学習意欲についての意見交換 ・仙台市立富沢中学校にて、授業観察と学習意欲についての意見交換 ・平成23年度生活・学習状況調査の質問項目決定
7月 8日 13日 14日	・仙台市立富沢中学校にて、授業観察及び視線測定の前備調査実施 ・仙台市立荒町小学校にて、授業観察及び視線測定の前備調査実施 ・平成23年度標準学力検査及び生活・学習状況調査実施
～12月	・授業観察及び視線測定映像分析検討
平成24年1月	・授業観察・視線測定映像分析から詳細分析計画立案 ・平成24年度生活・学習状況調査の質問項目改訂
2月	・平成24年度生活・学習状況調査の質問項目決定 ・生活・学習状況調査の結果分析報告
3月	・全教職員に学習意欲に関する内容を記載したリーフレットを配布

(5) 被災校学習支援委員会

震災のため、いくつかの学校で自校の校舎等が使用できない不自由な教育環境の中で授業を再開しなければならない状況にあり、児童生徒への学習支援の早急な対応が求められた。そこで、『被災校学習支援委員会』を立ち上げ、間借りをしなければならない学校と受入先の学校の教員を構成委員とし、仙台市教育センター、博物館、科学館、宮城教育大学とも連携しながら、不自由な環境の中での課題解決に向けた対応策を検討し、支援した。

実施日	被災校学習支援委員会
5月16日(月)	第1回被災校学習支援委員会 ①組織・日程・活動内容説明 ②連絡用のメールアドレス調査（メーリングリスト作成） ③ここまでの課題、実践例などの情報交換
5月～7月	①メーリングリストを利用し、課題や解決策の情報共有化 ②各学校にて実践 ③実践結果を評価

2. 調査研究の成果及び今後の課題

震災による県外からの教育復興加配教員や学生ボランティア、被災校支援委員会による被災校の児童生徒への学習支援等により、一学期中に前年度の未履修単元等を補うことができた。

「仙台市標準学力検査」は震災により学習環境が整っていない学校に配慮し、教科数を減らし、国語と英語の聞き取り問題を中止して実施した。「仙台市生活・学習状況調査」については、質問項目の表現等を見直して実施した。結果概要は以下のとおりである。

<仙台市標準学力検査結果概要>

- 小・中学校ともに、基礎的知識および応用力における平均正答率は、すべての学年・教科で期待正答率(※)を上回った。
- 昨年度、国語の「基礎的知識」における「読む能力」の正答率は、小学校6年生を除いた学年で期待正答率を下回っていたが、今年度はすべての学年で期待正答率を上回った。
(※ 設問ごとに正答できることを期待した児童生徒の割合)

<仙台市生活・学習状況調査結果概要>

- 早寝・早起きの生活習慣について、改善傾向が見られた。特に、「休日に早起きする小学生の割合(小3年 58.2 → 70.0)」は、昨年度に比べて大きく増加した。
- 地域との関わりについて、「地域の人にあいさつをしている(中3年 75.5 → 86.3)」、「困っている人を進んで助けている(中3年 73.5 → 81.1)」中学生の割合が、昨年度に比べて大きく増加した。
- 「人の気持ちがわかる人間になりたい(中3年 87.9 → 95.4)」、「人の役に立ちたい(中3年 83.6 → 94.0)」と思う児童生徒が、昨年度に比べて増加した。
- 「自分にはいいところがある(中2年 68.2 → 61.6)」、「将来のことを考えると楽しい気持ちになる(中2年 69.0 → 64.3)」と思う児童生徒が、昨年度に比べて減少した。

「学習意欲」の科学研究に関するプロジェクトでは、推進校2校において授業の様子をビデオで撮影し視線測定の前備調査を実施した。その結果、6つの分析対象行動(黒板・教師の注視、挙手・発言、ノート筆記、よそ見、私語、手遊び・体動)における分析が可能であるとの結論に至った。次年度は、モデル校における小学校3年生から中学2年生までの学級で授業分析を実施し、「学習意欲」について、脳科学、教育現場等の知見を活用し、科学的に学習意欲の指標と評価について研究していく計画である。また、これまでの仙台市標準学力検査と仙台市生活・学習状況調査の分析結果をリーフレットにまとめ、市内全教職員に配布することができた。震災1年を経過した平成24年度の学力検査と生活・学習状況調査の結果も引き続き分析する計画である。

本事業を含めた諸教育行政施策により、本市における児童生徒の基礎的学力は一定程度向上していると捉えている。しかし、応用力、特に表現力における課題が見られること、震災における学習環境への影響が今後どのように現れるのか懸念されることから、今後も具体的な指導改善策を例示するなど、積極的に取り組んでいきたい。さらに、小中学校が相互の教育について共通理解を図り、連携を一層促進して9年の指導の連続性や校種間の接続の円滑化を図るとともに、義務教育を修了するにふさわしい学力と社会性を身に付けさせ、学習意欲を向上させるために、仙台版のキャリア教育である「仙台自分づくり教育」を推進していきたい。